2021 年 11 月館員おすすめの本

『女ふたり、暮らしています。』（キム・ハナ、ファン・ソヌ）

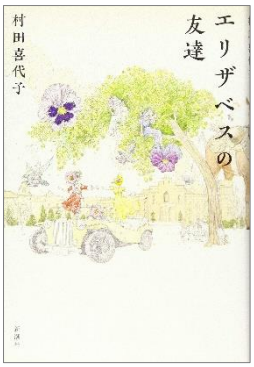
吉田　梨紗

韓国に暮らす二人の独身女性のエッセイ。多くの女性が悩むであろう結婚や出産、この著者の二人が、それ以外で自分の人生をよりよく生きるためにくだした決断は、同じもの同士同居をすること。二人でローンを組みマンションの一室を購入します。

二人の女性と四匹の猫の生活が始まり、自由に暮らす上で気を付けているのはお互いへの尊敬を忘れないこと。同居して良かった面も悪かった面も包み隠さず語っているので、自分らしく生きるヒントを得ることができます。多様な時代に新しい形の暮らしと家族を示してくれます。　（CCC メディアハウス）

『エリザベスの友達』（村田喜代子）

原　真由美



今年 97 歳になる初音さんは、認知症を患い老人ホームに入所しています。ここには第二次大戦の体験を背負った人たちが暮らし、自らの悲惨な記憶と戦ったり、美しい思い出にすがりついたりしながら、今では日常の殆どをうつらうつらと過去の世界に生きています。かつて天津の日本租界で暮らし自由で華やかな生活を経験した初音さんは、自らを「あたくしは……エリザベス」と名乗ります。娘たちは母親の記憶を呼び覚まそうと必死になりますが、結局どこの国のどんなエリザベスという女性になりきっているのか、聞き出すことは困難です。幻想の世界に生きるお年寄りたちの記憶は「目眩のするような自分だけの絶壁にたった一人で張り付いている」心の記録でもあります。記憶が消えていくことには悲しみや切なさが伴いますが、時空をすり抜けて夢と現実を行き来しながら生きる登場人物はみな、誇り高くさえ感じられます。　（新潮社）

『海をあげる』（上間陽子）

大久保美玲

沖縄出身の著者は沖縄の今を感じるため、普天間基地近くに住んでいます。そこで暮らす人々は、基地が街の経済を潤してくれる側面があるゆえに、騒音や米軍兵士の犯罪などの問題には沈黙している人が多いといいます。また、若くしてシングルマザーになり、風俗などの水商売で生計を立てなければならない女性が多いことも沖縄の現実です。著者は、そんな沖縄の人々の声にならない想いを聞き取り、記録に残す活動をしています。彼らが語った事実は、時にあまりにも壮絶で、面会の帰り道で気分が悪くなり座り込んでしまうことも。もはや、著者ひとりでは抱えることができない、だから「この本を読んでくださる方に、私は私の絶望を託しました。」という言葉で本書は締めくくられています。読者は彼らのために何もできないかも知れませんが、本書を通じてその想いを知り、受け止めることはできます。一人でも多くの人に読んで欲しい一冊です。　（筑摩書房）